様式第5号（第9条関係）

論 文 内 容 の 要 旨

報告番号		氏　名	永野　龍司
Retrospective analysis of heroin detoxification with buprenorphine in a psychiatric hospital in Japan （ 和 訳 ） 当院におけるヘロイン依存症者へのbuprenorphineによる解毒治療についての検討			

論文内容の要旨

背景：ヘロインは、強力な多幸感、精神・身体依存形成を有し、世界中で最も広く使われている乱用薬物の一つである。ヘロイン依存症の特徴は離脱症状の苦しさであり、最終使用から数時間経つと「自律神経の嵐」と呼ばれる多彩な自律神経症状が出現する。その離脱症状の苦しさから逃れるためにヘロインを使い続けるといった依存状態に陥る。このため、治療においては、離脱期の管理が治療の重要な課題となる。
兵庫県神戸市にある復光会垂水病院では、2005年より、ヘロイン依存症患者の解毒期の離脱症状を緩和する目的で、μオピオイド受容体の部分作動薬であるブプレノルフィン（商品名：レペタン）の注射剤を用いた置換漸減療法を本格的に導入してきた。今回、診療記録にもとづき、これまで当院で治療が行なわれた106例を対象にヘロイン依存症の解毒期におけるブプレノルフィン使用の有効性と安全性の検討を行なった。
方法：置換漸減療法とは最初に1日分のブプレノルフィンの投与量を暫定的に設定し、入院後に離脱症状が確認できた時点から設定した1日分の暫定投与量を投与し、離脱症状を評価しながらブプレノルフィンの1日投与量を調整・漸減投与し、解毒を試みるものである。
評価項目として、入院期間、ブプレノルフィンの投与期間（日数）、ブプレノルフィンの1日最大投与量（mg）、ブプレノルフィンの総投与量（mg）、および離脱症状の評価については、「臨床オピオイド離脱症状尺度（COWS）」の得点数を調査し解析した。この置換漸減療法の有効性の検証については、置換漸減療法の導入前と導入後の入院期間について*t*検定を行なった。また解毒治療の継続率（完遂率）については、Log-rank testを行ない、COWSとブプレノルフィン投与との関係については、Pearsonの相関分析を行なった。
結果：入院期間については、ブプレノルフィンによる置換漸減療法の本格導入後の群の方が本格導入前の群に比較して有意に入院期間は短く、かつ治療継続率（完遂率）も本格導入前と比較して有意な改善を認めたが、再入院率は上昇していた。
考察：ブプレノルフィンによる置換漸減療法により、離脱症状を顕著に軽減できることがわかった。従来の治療法と比較して解毒治療完遂率は有意に上昇し、入院期間も有意に短縮できた一方、再入院率が増えたことも明らかになった。ブプレノルフィンによる置換漸減療法の有効性と安全性に加えて、ヘロイン依存症者に対する維持療法の必要性が示された。